

# 戦後教育改革期の「教育評価」に関する研究：全人的な評価における「教育測定」の役割とその変化

松本，和寿

<https://hdl.handle.net/2324/4784717>

---

出版情報：九州大学，2021，博士（教育学），論文博士  
バージョン：  
権利関係：

氏 名 : 松本 和寿

論 文 名 : 戦後教育改革期の「教育評価」に関する研究  
—全人格的な評価における「教育測定」の役割とその変化—

区 分 : 乙

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論は、戦後教育改革期、指導と評価の一体化を目指し展開された「教育評価」において、児童生徒の特性を客観的に把握する方法として用いられた「教育測定」の役割とその変化を明らかにすることを目的とし、「第Ⅰ部経験主義教育における態度に関する評価」、「第Ⅱ部ガイダンスにおける『教育測定』の理論や技術の利用」、「第Ⅲ部『教育測定』役割の変化」の3部で構成した。

なお、戦後教育改革期の義務教育の現場における「教育評価」の方法に着目する本論では、この時期の教育心理学者や教員の言説にみられる、学力測定の基本的な方法や心理測定の技法、教育統計の技術などを区別せず「教育測定」とした呼称をそのまま用いた。

また、経験主義教育とともに戦後教育改革の柱であったガイダンスは、教科指導を含む全人格的な人間形成を目指す概念であり、児童中心主義の下で両者は一体であったが、本論ではそれぞれに「教育測定」が果たした役割やその変化について検討した。

第Ⅰ部では、経験主義教育の展開とその課題を態度に関する評価の観点から明らかにした。第1章では、桜田小やコア連が目指した経験主義教育や学力をめぐる議論、また、1947（昭和22）年の学習指導要領が示した学力の評価方法について、第2章では、経験主義教育の特質である態度に関する学力の評価方法と客観テストで態度を評価することに対する教員の意識を、そして第3章では、高等学校の入学者選抜や全国規模の学力調査における態度に関する学力の評価方法について検討した。

第Ⅱ部では、ガイダンスにおける「教育測定」の役割について明らかにした。第1章では、ガイダンスその概念を明らかにし、「教育測定」の技術がそこにどう位置付くのかについて、第2章では、5段階相対評価と標準学力検査に焦点を当て、文部省や教育心理学者らがガイダンスの枠組のなかでその特質をどう説明したのか、また教育現場の受け止めについて、第3章では、全人格的な人間形成のため「教育測定」で得た情報を集約する「累加記録摘要」の特質を検討した。

第Ⅲ部では「教育測定」の役割の変化を明らかにした。第1章では、「累加記録摘要」に対する教育現場の意見や、それが1955（昭和30）年に改訂される経緯をふまえ、改訂前後の「教育評価」機能の変化を、第2章では、当初「教育評価」の資料とされた5段階相対評価の役割や標準学力検査の目的の変化について、そして第3章では、高等学校入学者選抜や全国規模の学力検査における態度の評価問題の型式や位置付けの変化をもとに、経験主義教育やガイダンスの転換について検討した。

こうした検討を通して得た結論は次のとおりである。1948（昭和23）年の「小学校学籍簿」以降実施された5段階相対評価は、教員が児童の学力の相対的な位置を把握し指導法の工夫を行う資料

として利用された。知能検査や標準学力検査は、準拠する集団の人数や質に影響を受ける5段階相対評価の欠点を補うために用いられた。これらの「教育測定」の技術は後に能力主義批判の対象となるが、こうした事実はこの時期に使われた「教育測定」が、批判されるような児童生徒の学力による振り分けを目的としたものではないことを示している。一方、学力以外の特性の把握にも「教育測定」の技術が用いられた。このように、戦後教育の新たな理念の下、教員の主観に左右されない客観的な根拠に基づく評価のために、教育現場は「教育測定」を積極的に受容したのである。

しかし、ほどなく「教育測定」の役割は変化する。その理由は態度を客観的に評価することの困難にあった。困難とは、学力としての態度を客観テストで把握する問題形式に完全なものがないという技術的な困難と、ガイダンスにおける児童生徒の観察や記録などの日常的な実施に伴う多忙という実践上の困難である。そのため、学力としての態度は「教育評価」の中心的な課題から外され、ガイダンスは「特別教育活動」の設置以降、生徒指導的な取組へと移行していく。これらのことは、態度の育成を学校教育の目標としつつその結果は評価しないという意味であり、「教育評価」の主旨である指導と評価の往還を断つことを表す。つまり、経験主義教育を標榜する1951（昭和26）年版の学習指導要領期ではあるが、教育現場では、指導においては態度の育成を主眼とする経験主義教育に則り、評価においては測定可能な学力や領域に焦点化した評価を実施する状態になっていく。

「教育評価」の主旨と異なるこうした指導と評価のずれは、教育理念と教育実践のずれともいえる。そして、このずれに関する合理的説明がされぬまま1960年代へと進み、「教育測定」批判へとつながっていくのである。